

天平の娘子歌の諸相

—— 大伴家持をめぐる相聞歌群を中心として ——

島 田 裕 子

一

後期万葉の女性達の相聞歌の作歌状況を把握することを目的として、前稿(大伴家持をめぐる相聞歌群(一)——女郎歌の諸相——)では、大伴家持への女郎達の相聞歌を調べていった。本稿では、娘子達の歌を見ていきたい。対象とした娘子歌は家持をめぐる娘子達の相聞歌に加えて——それだけでは用例が少ないので、配列等から同時代に詠まれたと推定される娘子歌群を加えることとした。

その調査対象になったのは、(一)家持へ相聞歌を確かに贈ったと考えられる、河内百枝娘子、粟田女娘子、巫部麻蘇娘子、日置長枝娘子、(二)家持への相聞歌であろうと配列より推測される、安都屏娘子、丹波大女娘子、豊前国娘子大宅女、(三)家持への相聞歌とは考えられにくい、配列より同時代の娘子、池田(他田)廣津娘子、県大養娘子、(四)家持とは関わりはないが同時代(天平十二年前後)の娘子の歌として狭野孝上(弟上)娘子、以上である。各句の類同句表は本論の末に置いたが、それと対照しつつ検証していく。

天平の娘子歌の諸相 —— 大伴家持をめぐる相聞歌群を中心として ——

二

(1) 河内百枝娘子

伝未詳。岸本由豆腐の『万葉集攷證』には「河内は氏か、國名か。百枝は名か、その住る所の地名か。すべて考えがたし」とある。佐伯有清編『日本古代氏族事典』によれば、川内とも書き、その名は河内国にもとづく。『新撰姓氏録』の河内国諸蕃に渡来系の祖をもつ河内忌寸、河内造、河内連があり、特に河内連は、安羅日本府の河内直(舒明紀二年七月)や河内直鯨(天智紀八年)、河内連三立麻呂(統日本紀)神護景雲三年十月)等の名が見える。河内連氏は河内国の有力土豪のひとつであったと考えられる。河内百枝娘子は河内連か他の忌寸、造を出自とし、名が百枝であろう。遊行女婦との説もあるが、他の娘子の多くがこの年代では大官人であるように、平城京に出仕する女官であろう。河内百枝娘子は「大伴宿禰家持に贈る歌」という題詞をもつ二首の歌を残している。

〈a〉 はつはつに人を相見ていかにあらむいづれの日にかまた外に見む (四・七〇二)

「はつはつに」は「ほんのちよつと、ちらりと」という意で他に

は四例ある。七・一三〇六、十一・二四六一とともに人麻呂歌集歌である。類歌はない。

へb) ぬばたまのその夜の月夜今日までに我は忘れず間なくし思
へば
(四・七〇二)

「ぬばたまの」は枕詞。各巻に分布しているが、多用されるのは、卷四、十一、十二、十三、十五である。類句表を参照されたい。表現は類同句が散在するが、類歌はない。女郎達の歌のように、古歌を踏まえて詠んだり、組み合わせたりして作ったという跡はない。一見して平凡な歌であるが、類歌性から離れて、自らの気持ちのままを素直に卒直に伝えることを目的とした修辭意識のない歌である。

(2) 粟田女娘子

粟田氏は和珥氏の後裔氏族。同族に春日、大宅、小野、柿本などの氏がある。和珥氏は欽明朝ころより春日氏への改氏姓をし、その後、大宅、粟田、小野、柿本氏等に分かれていった。粟田氏は京都市伏見区粟田口一帯の愛宕郡上粟田・下粟田を中心に居住していた。皇極天皇の御代に巨勢、大伴と並ぶ重責にあつたと考えられる粟田細目臣。迎新羅使右副將軍・粟田朝臣必登、漢語教授となつた粟田朝臣馬養、『大宝律令』撰定に功のあつた粟田真人。粟田氏は学問や対外関係で活躍する人物を輩出する。粟田女娘子は、本稿で調査対象となつた娘子の中では一番有力な氏族を自出とする。

へa) 思ひ遣るすべの知らねばかたもひの底にそ我は恋ひなりに
ける 土境かたもひの中しにせせり
(四・七〇七)

「大伴宿禰家持に贈る歌二首」という題詞を有する歌のひとつ。「片思ひ」と「土境かたもひ」(蓋のない水を入れる工器)とを掛けて、土境の

中に、片思ひに沈む気持ちを詠んだ歌を書き記して贈つたもので、意表をついた贈り方で、機知に富んだものである。「思ひ遣るすべの知らねば」という表現は、「……思ひ遣る たづきを知らに……」(一・五 軍王)、「……思ひ遣るたづきを知らに」(九・一七九 二田辺福麻呂)、「思ひ遣るすべのたづきも今はなし」(二・二八九 二)、「思ひ遣るすべのたづきも今はなし」(十三、三二六)という類以表現がある。また、「かたもひ」は四・五三六、七二七、七一九、十・一九八九、十一・二七九八、十二・三〇七八に片思ひの意としてある。家持が娘子へ贈つた七首歌群の中に「つれなくもあるらむ人を片思ひに我は思へば苦しくもあるか」(四・七一七)と、「片思ひ」という言葉を用いた歌があり、粟田娘子の歌と並べてみると関連性も考えられないことなく、改めて匿名の娘子歌の内実を考えさせられる。

四句、五句は独自の表現であり、「思ひ遣るすべの知らねば」と二句に渡つて類同する歌はあるが、類歌と言えるほどの歌ではない。

へb) またも逢はむよしもあらぬか白たへの我が衣手に齋ひとど
めむ
(四・七〇八)

この歌には、「白たへの我が衣手を取り持ちて齋へ我が背子直に逢ふまでに」(十五・三七七八 狭野弟上娘子)という、表現、発想ともに類以した歌がある。「齋ひとどめむ」はいみ清めてあなたを大切に留めておこうという意であり、特別な習俗があつたか否かは不明である。

粟田女娘子の歌は、発想の奇抜さ、機知は並々ならぬものをへa) で示めているが、反面、類以表現の重なり合う歌もあり、それは

万葉集の和歌に対する享受が浅くないことを物語っている。粟田氏という学問の分野に優れた人材を出している氏族を出自としているからだろうか。

(3) 巫部麻蘇娘子

巫部は神事に仕える職掌の部民である。『新撰姓氏録』に「巫部連。同神（饒速日命）十世孫」とあり、また『統日本後紀』承和十二年七月己未条にも「昔属二大長谷稚武天皇時一。公成始祖真椋大連二筑紫之奇巫一。奉_レ救_レ御病之膏肓一。天皇寵_レ之。賜_二姓巫部_一」とある。『統日本後紀』大正二年（七〇二）三月戊寅条に巫部宿禰博士も記されている。巫部麻蘇娘子はこのような氏族を出自とし、麻蘇は名であろう。

巫部麻蘇娘子の歌は四首。そのうち八・一五六二歌には家持の和ふる歌が続いている。家持と相聞歌をかわした娘子の一人である。

（a） 我が背子を相見しその日今日までに我が衣手は乾る時もなし
（四・七〇三）

「我が背子」は各巻に散在しているが、特に巻十、十一、十二、そして家持の相聞歌が集中する十七巻に多出する。また、「我が衣手」も常套の表現で巻十、十一、十三に各二首、全体で十例類同表現がある。また巻十の

夏草の露別け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき

（十・一九九四）

と下句が類似しているもので娘子歌としては珍しい例である。

（b） たく繩の長き命を欲りしくは絶えずて人を見まく欲りこそ

天平の娘子歌の諸相——大伴家持をめぐる相聞歌群を中心として——

（四・七〇四）

類同表現の少ない歌で初句「たく繩」は他に二例のみ。「たく繩の」から「長き命」と導き出す枕詞は、人麻呂の二・二二七の「……いかさまに 思ひ居れか たく繩の 長き命を 露こそは……」（吉備津采女への挽歌）に同じ表現があるのみだ。残りの一例は、「水沫なすもろき命も栲繩の千尋にもがと願ひ暮らしつ」（五・九〇二 憶良）の「老身重_レ病、経_レ年辛苦、及思_二児等_一歌七首」の反歌の一つがそれである。ここでは「栲繩」は長い命を修飾する枕詞として「千尋」につながる。「たく繩の」という枕詞は、柿本人麻呂、山上憶良、巫部麻蘇娘子の三例のみで、人麻呂が枕詞として早く用いたにもかかわらず、ほとんど用いられていない。巫部麻蘇娘子はどこかで人麻呂の吉備津采女挽歌を読んでいたと考えられよう。三句、四句には類句はないが、五句になると「見まく欲りこそ」の「見まく欲り」は十九例もある。この場合、（欲り）に後につく助詞、助動詞の違うものも類句表に入れた。ここに大伯皇女の歌に

（二・一六四）

見まく欲り我がする君にあらなくに何しな来けむ馬疲るるに
と、「見まく欲り」が用いられている。但し全体としては、類句はない。

（c） 誰聞きつこゆ鳴き渡る雁がねの妻呼ぶ声のともしくもある
（八・一五六二）

巻八の「秋雑歌」にある歌で、後に大伴家持の和ふる歌一首が続く。雑歌の部立に入れられているが、家持が疎遠になったのを恨む相聞歌である。「雁がね」「雁」は万葉集には数多く詠まれているが、

「雁がねー」だけでも別表の通りである。しかし雁の音を賞翫する趣味は、巻十一、十二にはない。雁の作者未詳歌は巻十に集中しており、その他には巻七、十三に数例あるのみである。

当然のごとく、(c)歌は巻十一、十二の相聞歌集に類歌はなく、巻十に

聞きつやと君が問はせるほととぎすしのに濡れてこゆ鳴き渡る (十・一九七七)

の問答歌に類以表現、同表現が見られる。しかし、むしろ家持の和ふる歌「聞きつやと妹が問はせる雁がねはまことも遠く雲隠るなり」(八・一五六三)が、十・一九七七歌の上句を反復模倣して、うまく用いて、和歌を返している。(c)歌に戻れば、「こゆ鳴き渡るは(c)歌以外に四例しかなく、巻八に二例、巻十に二例で、娘子の歌は巻十の先の歌と無関係とは言いがたく、やはり巻十の歌を踏まえつつ、自らの歌を詠んだのではないか。けれど家持ほどには類以せず、むしろ実用的に自らの思いを訴える手段として歌を詠んだために類歌性から離れていつている。

(d) 我がやどの萩花咲けり見に来ませいま二日だみあらば散りなむ (八・一六二一)

巻八の「秋相聞」に収められる。「我がやどー」は巻三以降の巻々に点在しており、特に巻八に二十一例、巻十に十五例と多い。平城京での貴族の生活様式から詠まれた素材と考えられるが、巻十一に三例、巻十二に全くないのは、巻十一、十二の古歌集という特質を物語っている。「萩」を詠んだ歌は多いが「萩花」という言葉は他に巻十に一例あるのみ。類句としては「我がやどの萩咲きに

けり散らぬ間にはや来て見えし奈良の里人」(十・二二八七)が、表現・発想とも共通している。この(d)歌で「いま二日だみあらば散りなむ」の「いま二日だみ」はいかにも事実に基づいた彼女自身の表現のようであるが、全く同じ表現が十三・三三一八、十七・四〇一一(大伴家持)にある。家持歌は後の歌であるから別として、巻十三の「……いま七日だみ早からば いま二日だみ あらむとそ君は聞こしし な恋ひそ我妹」(十三・三三一八)の問答の部立にある長歌の「いま二日だみ」と無関係であるとは断じきれない。

(4) 日置長枝娘子

日置氏は神霊を迎えるために灯す火の材料調達や炭焼などに当たっていた日置部の伴造氏族を源とする。⁴⁴⁾『心神記』に「是大山守命者、土形君、幣岐君、榛原君等之祖」とある。また『新撰姓氏録』に高麗国人伊利須使主を祖とする渡来系の日置氏もみえる。

(a) 秋付けば尾花が上に置く露の消ぬべくも我は思はゆるかも (八・一五六四)

巻八の秋雑歌の部立にある。各句ともに類同表現があるが、類歌としては

我がやどの夕影草の白露の消ぬがにもと思はゆるかも

(四・五九四 笠郎女)

秋の田の穂の上に置く白露の消ぬべくも我は思はゆるかも

(十・二二四六)

が挙げられる。特に十・二二四六の作歌未詳歌によく似ている。この類同性は今まで述べた娘子の歌とは異なる。

(5) 安都扉娘子

安都は氏を扉は名を示すか。安都氏は物部氏の枝族で、安斗・安刀・阿斗・安都・迹とも記す。物部氏の本拠地であった河内国洪河郡の跡部郷の地名を氏名としている。「扶桑略記」には空海の息子の善珠の俗姓は安都宿禰とあり、また『続日本後記』には空海の縁戚に阿刀宿禰大足という者があり、空海の母も『御遺告』によれば阿刀氏の出自と伝えられる。阿刀氏は宗教界に結びつきの強い氏族であったらしい。

〈a〉 み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる

(四・七一〇)

清明な相聞歌である。「夢にし見ゆる」は類同表現が多いが、類歌は見当らない。

(6) 丹波大女娘子

丹波は国名か、氏族名か分かれるところである。丹波氏については、丹波国造の子孫で、丹波国丹波の地を本拠とした豪族である。

また、倭漢氏系の氏族にも「丹波史。後漢靈帝八世孫孝日王之後也」(『新撰姓氏録』)と、丹波氏と称する一族がある。丹波大女娘子の大女は名と考えられる。この娘子は三首の歌を万葉集に残す。

〈a〉 鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉落ちて浮きたる心我が思はな

に

(四・七一)

初句より三句までが、「浮きたる」を起こす序詞となっている。

この序詞は「遊ぶこの池に」とあるように眼前の実景を詠み込みつつ序にしたもので、字余りが多いが、丹波大女娘子独自の表現であり、宴席での即興的な歌とも考えられる。五句の「我が思はななく」

以外は類同句はなく、独自の表現が際立っている。

〈b〉 うまさけを三輪の祝が齋ふ杉手触れし罪か君に逢ひかたき

(四・七一一)

「味酒」は三輪の枕詞。卷七に「み幣取り三輪の祝が齋ふ杉原薪伐りほとほとしくに手斧取らえぬ」(七・一四〇三)があり、二句三句は類似している。

〈c〉 垣穂なす人言聞きて我が背子が心たゆたひ逢はぬこのころ

(四・七一二)

「垣穂なす」と「人言」がつながるのはこの一首のみであるが、「垣穂なす」については他に「垣ほなす人は言えども高麗錦……」(十一・二四〇五)、「……垣ほなす人のとふ時 千沼壮士……」(九・一八〇九)、「垣ほなす人の横言繁みかも……」(九・一七九三)という類似する発想表現がある。比較的多用される語句で歌を作っているが、類歌はない。

(7) 豊前国娘子大宅女

この娘子には題詞に「いまだ姓氏を審らかにせず」とあり、豊前国、今の福岡県東部と大分県北部あたりの出自で氏は不明。名が大宅女か。遊行女婦と考えられるか。

〈a〉 夕闇は道たづたづし月待ちていませ我が背子その間にも見

む

(四・七〇九)

この歌は

妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる月待つこと

(十一・二六六六)

との影響関係が強い。また

天平の娘子歌の諸相——大伴家持をめぐる相聞歌群を中心として——

……あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひて 君
待つ我を (十三・三二七六)

あしひきの山より出づる月待つと人に言ひて妹待つ我を

(十三・三〇〇二)

といった相聞の古歌を踏まえて詠んでいると言えよう。が、類歌はない。

〈b〉 雲隠り行くへをなみと我が恋ふる月や君が見まく欲りする

(六・九八四)

〈a〉歌と〈b〉歌は巻四、巻六に分かれているが、共通の趣きを有する歌である。この歌は、

三日月のさやにも見えず雲隠り見まくぞ欲しきうたてこのころ

に類似した発想・表現が見られる。

(8) 池田(他田) 廣津娘子

池田は他田の可能性もある。『新撰姓氏録』左京別に「池田朝臣。上毛野朝臣同祖。豊城入彦命十世孫左太公之後世」とあり、上毛野氏同祖氏族の一つで、上野国那波郡池田郷や同邑築郡池田郷等に居住していたとみられる。また池田(他田)朝臣真枝は宝龜元年十月に従五位下で上野介、同五年三月に少納言、延暦六年二月鎮守副將軍にまで任ぜられている。池田(他田)廣津娘子の歌は巻八に二首ある。

〈a〉 梅の花折りも折らずも見つれども今夜の花にはなほしかず
けり (八・一六五二)

梅の花は巻五、巻十に集中して出てくる。また、巻五以降、時代

が明らかな巻では巻八に頻出している。〈a〉歌の「梅の花折りかざし」という表現は巻五に四首ほどあるが、「折りも折らずも」は、この歌が初出であり、後に家持が用いている。歌意から宴席歌かと考えられるが、一句ごとの類同性はあっても類歌はなく場を心得て詠んで即妙である。

〈b〉 真木の上に降り置ける雪のしくしくも思はゆるかもさ夜間

〈我が背

(八・一六五九)

この歌も同様に類歌はない。

(9) 県大養娘子

屯倉などの守りを犬使つて当たった犬養部と犬養氏を統属するのが中央の県大養連の職掌であった。県大養氏には、県大養宿禰三千代をまず挙げねばならない。三千代は、軽皇子の乳母となりやがて不比等の妻となつて光明子を生んだ。光明子は藤原氏隆盛の基となる。また先夫との間に葛城王、後の橘諸兄を生んでいる。県大養娘子は、このような氏族を出自とするが、名は不明。

〈a〉 今のごと心を常に思へらばまつ咲く花の地に落ちめやも

(八・一六五三)

別表のように各句の類同はあるが、この歌も類歌はない。

以上、家持をめぐる娘子達の歌及び同時代の娘子達の歌を見てきた。これでは用例が不十分かと思ひ、天平十二年前後の作とされる狭野弟(茅)上娘子の歌も援用してゆきたい。

(10) 狭野弟上娘子

巻十五の後半に中臣宅守と狭野弟(茅)上娘子の相聞歌群がある。

但し、この歌群全体が虚構かという説もある。が、十五・三七七二歌は、『続日本記』に記された天平十二年六月の大赦に宅守が漏れた時に作られたとする、史実との符合もあり、それより推し量れば家持周辺の娘子達と同時代の作となるので、資料としてここでは扱っていきたい。

狭野弟(茅) 上娘子は西本願寺本には狭野弟上娘子と書かれている。茅上か弟上か分かれるところであるが、『代匠記』によれば「狭野ハ娘子ガ姓、弟上ハ名ナリ」とした上で、弟と茅は誤写とし、茅という草は女性によそえるものとして茅上を正しいとする。また、狭野は氏か出身地か明らかではない。狭野という地名は、『播磨国風土記』に播磨国攝保郡の狭野が記されている。現在の新宮町佐野のあたりである。氏族としては『新撰姓氏録』にない。天平二年大宰師旅人宅の梅花宴に列席した筑前介、佐氏子首の佐氏との関連も考えがたく、狭野という地よりの出身であるので、その呼称となったのかも知れない。この娘子はその出自は不明であるが、万葉集には「蔵部の女孀」と記され、後宮令の蔵司の女孀であると考えられる。相手の中臣宅守は『続日本記』にも記され、実在の確かな人物である。

狭野弟(茅) 上娘子の歌は二十三首である。中臣宅守との相聞の絡みで表現は宅守の歌と重なり合うこともあるが、まずは表を参照されたい。表現の上では、総じて巻四、巻十、巻十一、巻十二と類同性が高い。特に巻十二の羈旅発思等からの影響は看過できない。また一句一句の類同が各巻に散在していて、娘子の表現の多様さ歌才を示すが、類同歌は意外に少なく、彼女独自の歌の世界を作り上げた。

天平の娘子歌の諸相——大伴家持をめぐる相聞歌群を中心として——

げている。

狭野弟上娘子の歌群で二句以上が類同を示す歌は以下の通りである。十五・三七二六、三七五一、三七五二、三七六八、三七七四、三七七七の六首で、二十三首の歌群の中でその比率は決して高くはない。その六首の内実を次に見ていこう。

〈a〉このころは恋ひつつもあらむ玉くしげ明けてをちよりすべ
なかるべし (十五・三七二六)

この歌は次の
近江道の鳥籠の山なる不知哉川日このころは恋ひつつもあらむ
心をし君に奉ると思へればよしこのころは恋ひつつをあらむ
らむ (四・四八七 岡本天皇御製歌)

の二首の四句・五句が類同している。
〈b〉白たへの我が下衣失はず持てれ我が背子直に逢ふまで
(十一・二六〇三)

この歌は、
夜も寝ず安くもあらず白たへの衣は脱かじ直に逢ふまでに
(十二・二八四六)

と二句、共通しているが影響関係はわからない。
〈c〉春の日のうら悲しきに後れ居て君に恋ひつつ現しけめやも
(十五・三七五二)

「後れ居て」という表現は、集中十三例。「後れて居らむ」を含めて十五例ある。
後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へ我が

背

(但馬皇女 二・一一五)

を初出としている。相聞歌によく出てくる表現で、「後れ居て我れはや恋ひむ」(九・一七七二、一七七三)、「後れ居て我が恋ひ居れば」(九・一六八二)、「後れ居て長恋ひせずは」(五・八六四)といったものがあるが、それ以上の類同性、影響関係はみられない。むしろ、あしひきの片山雉立ち行かむ君に後れて現しけめやも

(十二・三三二一〇)

の歌柄こそ、この歌に近いものがある。

〔d〕このころは君を思ふとすべもなき恋のみしつ音のみしそ
泣く (十五・三七六八)

は

すべもなき片恋をすとこのころに我が死ぬべきは夢に見えきや
(十二・三三一一一)

の卷十二の歌に二句にわたって類同性がみられ発想も似ている。

〔e〕我が背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな
(十五・三七七四)

この歌も

我が背子^レがその名告らじとたまきはる命は捨てつ忘れたまふ
な (十一・二五三二)

の卷十一の歌と類同性が濃く、類歌である。

〔f〕昨日今日君に逢はずするすべのたどきを知らに音のみし
そ泣く (十五・三七七七)

この歌は

……波のむた……いたもすべなみ……たつきを知らに……音の

み泣きつ……

(坂上郎女 四・六一九)

……せむすべの たどきを知らに……白たへの……

(山上憶良 五・九〇四)

……いたもすべなみ あらたまの 月の変はらば せむすべの
たどきを知らに…… (三・三三二一九)

の長歌と二句にわたつての類同表現がある。

以上二句以上の類同表現をもつ歌、六首を見てきた。その他に十五・三七四七、三七四八は自作間での自己模倣がみられる歌である。狭野弟子娘子の歌二十三首中、二句以上の類同表現をもつ歌の内実はこのようなものである。類想、類句性の濃かった女郎歌とは歌の作り方が異っていて、意識的な歌の引用、組み変えといった類同性はうすい。しかし狭野弟子娘子の歌は卷十二、特に羈旅発思の部立歌と、発想、表現の類似があることは否めない。例えば、

旅の夜の久しくなればさにつらふ紐解き放せず恋ふるこのころ
(十二・三三二四四)

霞立つ春の永日を奥かなく知らぬ山路を恋ひつつか来む
(十二・三三一五〇)

白たへの君が下紐我さへに今日結びてな逢はむ日のため
(十二・三三一八二)

あしひきの片山雉立ち行かむ君に後れて現しけめやも
(十二・三三二一〇)

等と比較すれば明らかである。ただし、女郎歌のように二首を組み合わせて作ったような顕著な類歌性はない。先の六首の歌のあり様も

半数以上は二句にわたる類同表現をもつ歌と規定したほうが適當であり、残りの十五首も、発想、表現は卷十二とひびき合うものも多
いが類歌はない。

三

以上、家持をめぐる娘子達、および同時代の作と推定される娘子の歌を冗長に見てきた。総じて言えるのは、一句一句の類同はあつてもいわゆる類歌は少ないということである。ここに天平年間の同じ時代であっても女郎歌と娘子歌では違いがある。また女郎達が古代中央有力氏族の出自であるのに対して、娘子達は地方の豪族や中小氏族の出自が大半である。

女郎歌については前稿でその相聞の実相を調べていった結果次のようなことがわかった。前稿の反復となるが、家持へ贈られた女郎達の歌より、天平の女郎達の一般的作歌状況を把えるのに適した、大神女郎、平群氏女郎等の相聞歌を選び、類句調査の結果、これらの女郎達の相聞歌にはきわだつた共通性があることがわかった。まず類歌性が著しく強い。卷々の先行歌の表現を模倣したもの、二つ以上の先行歌の組み合せで作つた歌も多い。このような特質は、女郎達が先の卷々の歌を手本として読みながら作つていった。また、古歌をことさらに引くことで教養の深さを示す気持ちもあつた。そこにはよい歌を作ろうという意識も強く働いており、また推敲をするだけの時間的空間的距離もあつたということが窺える。

このような女郎歌のあり様と娘子歌のあり様は重ならない。天平時代の女性達の相聞歌は、女郎歌も娘子歌もほとんど区別されずに扱

天平の娘子歌の諸相

—— 大伴家持をめぐる相聞歌群を中心として ——

われているが、類同表現を調べていくと、実際には異質な面があることが明らかになつた。それは、作歌方法の、意識の違いが反映したものであり、女郎と娘子達の教養の質の違い、歌の詠まれる場の違いについて考えさせられる。

万葉集の女流歌人は、妃、皇女、王、女郎、娘子と年代によつて歌の担い手が少しずつ変化していく。娘子の歌が多く出現するのは、天平時代に入つてからである。その多くは家持という採録者に贈られたという特殊な事情を考えなければならぬが、模倣性が少なく歌の伝統に把われない娘子達の歌い方には、新しく作歌を担つていく階層の出現を感じずにはいられない。奈良時代の律令官僚組織では官僚の定員数は一万二千五百六人。そのうち男性は一万七百二十人。女性^注は七百九十四人という。律令国家の成熟とともに、平城京に出仕する女官層が新しく歌の担い手になろうとしてもおかしくはない。

もししきの大官人はさばにあれど心に乗りて思はゆる妹

(四・六九一 家持)

と家持が詠んだ娘子は、平城宮の女官であつた。狭野弟上娘子も蔵部の女孀、女官であつた。娘子達の歌の実用性、類歌の少ない生き生きとした語り口は、平城宮で働く女官達が新しい女流歌人層として活躍し始める動向を示めしていると考えてよからう。

注1～8 佐伯有清編『日本古代氏族事典』雄山閣出版

注9 折口信夫「相聞の發達」(『折口信天全集』)中岡好正「万葉集卷十五と中臣宅守相聞に関する一考察」(『国学院雑誌』昭和二年七月)

注10 服部喜美子『万葉女流歌人の研究』。氏の「中臣宅守と狭野茅上娘子贈答歌」、「中臣宅守・狭野茅上娘子贈答歌群の構成と性格」では、歌群の詳細な検証により、二人の歌の個性の差があることより、仮託の作品でない論じられる。

注11 服部喜美子氏は「笠女郎と狭野茅上娘子」(『万葉女流歌人の研究』)で笠女郎の類歌性と茅上娘子の類歌の稀少さを指摘されるが、歌の巧拙は別としてそれは女郎歌と娘子歌全般に関するものであることを本稿では述べたい。

注12 山口博『王朝貴族物語』(講談社現代新書)

○歌の本文は『日本古典文学全集・万葉集』(小学館)による。

○類句表には助詞・助動詞等に違いのある類似表現をもつ句も適宜加えた。

(2) 粟田女娘子										(1) 河内百枝娘子										歌人名 歌番号 句/卷
4-708					4-707					4-702					4-701					
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	
	1	1							1											1
		4												4						2
		5							1					2			1			3
		3					3	1			1	2		6			1			4
		2												1			1			5
		1												2						6
		2									1			5					1	7
		1												1						8
		2							1					4						9
	2	2					1					1		4						10
	3	9		1			1	1			1	1		9			2		1	11
	1	13	1				1		2	1	1			8		1	1			12
		3							1		1			10						13
		1																	2	14
		5												9						15
														2						16
		3	2					1	1		1			5						17
		1									1			2						18
														2						19
		2												3						20

【類句表】 ※表の中の数字は類同句の数

(3) 巫部麻蘇娘子															歌人名 歌番号 句/卷					
8-1621					8-1562					4-704						4-703				
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	
																1				3
									1				1	1	1					1
				3					1								1			2
				4					3					1						12
				3										1						4
				2		1	1			2										1
				1						7						1				4
				20		1	7	2		1										3
				1			3			2										5
		1	1	21	1	2	18	2		2					1	2	1			1
				3						4						2				10
														1		1				13
													1		1	1				9
							2			1					2					4
																				2
				3			3			1					1					14
																				2
																				16
				1			1			1										9
										1										2
				4			1													18
										1										7
				1						1										19
																				5

(6) 丹波大女娘子					(5) 安都扉娘子					(4) 日置長枝娘子					歌人名 歌番号					
4-712					4-711					4-710						8-1564				
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 卷
				1																
																				2
					2										1					3
					1					4				1	5		1			4
															1					5
															2					6
										1				1	2					7
			1	1	1	2						1			4		1	1		8
				1	1	1									1					9
1					1							1			4	1	5	1	1	10
					1	6				1		1			4			1		11
						3				2	1	1		1	6			2		12
			1		1														1	13
					1									1						14
										2					1					15
					1										1					16
												1			3					17
															2				1	18
																	1		3	19
					1									1	2					20

(8) 池田廣津娘子					(7) 豊前国娘大宅女					(6) 丹波大女娘子					歌人名 歌番号					
8-1652					6-984					4-709						4-713				
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 卷
							1					1					3			
					1		4		1								1	1		2
1				2	1				4					1			2	2		3
				1	4		3										12	7		4
				29					1								1	1		5
1		1			1		1		1								4			6
					7		1		1								3			7
1				16	1		1		4								5			8
					2		2		1								1		2	9
				19	2		3		6					1			10	1		10
					4		3		1					1		1	13	5	1	11
1								2				1					9	10		12
					1		3	1				1					4			13
																	2	2		14
					1												2			15
																	2			16
			1		4	1			1								9			17
			1		2	1			1				1	1			2			18
				2	5				1								7			19
				3	1							1					5			20

(10) 狭野弟上娘子					(9) 県犬養娘子					(8) 池田廣津娘子					歌人名						
15-3724					15-3723					8-1653					8-1659					歌番号	
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句	卷
																					1
				2					2									1			2
									5							1					3
			2						4							5	1				4
			2	1						1						1					5
									2							2					6
									6							2	1				7
									8							4	1				8
								2	3					1		1					9
									13		1					4			1		10
					1				10							4	3				11
			1		2			2	7							6	3				12
									5								1				13
									2			1									14
				1	1				4							1					15
									4							1					16
									12					1		3	2	2			17
									4							2					18
				1					15								1				19
									5							2	1				20

(10) 狭野弟上娘子																				歌人名	
15-3746					15-3745					15-3726					15-3725					歌番号	
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句	卷
																	1	1		3	1
																	2	4		1	2
																	1	1	5	2	3
			2					1		1		2	3	3	1	1	4		13	4	
										2							1	2		1	5
																	1			4	6
																	2		5	2	7
																	1	1		5	8
										1		2					2		2	1	9
			3	1						2				5	1	1	2		10	10	
			2					2		2		1	2	1		3	9		13	11	
			3					1		1		1	1	3	1	3	13		9	12	
			3													1	3		4	13	
													1			3	1	1	2	14	
			1					2		1				1	0		4		1	15	
			1											2	1				2	16	
								1		1		4			1	1	3		9	17	
												1				1	1		2	18	
																1			7	19	
																5	1	2		5	20

(10) 狭野弟上娘子																			歌人名		
15-3750					15-3749					15-3748					15-3747				歌番号		
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句	卷
				1																1	1
				5																	2
				6															3		3
				5						2					2		1	1	4		4
				3					1	2				1	2				3		5
			1	4																2	6
				1																1	7
				1						1						1				21	8
				3																1	9
		2	1	3		3	3													21	10
			1	3		4				3					3					3	11
				1		1	2	1	1		1				1		1				12
		4		13																	13
																					14
				3					1	2	2			1	2	2	1		2		15
																					16
		1				2														1	17
				2																	18
				7																4	19
				4																1	20

(10) 狭野弟上娘子																			歌人名			
15-3767					15-3753					15-3752					15-3751				歌番号			
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句	卷	
																					1	1
													1								4	2
								1						2							5	3
1				1			2	3					1			1					4	4
													1								2	5
								1													1	6
2					1	1												1			2	7
2								1					1	1							1	8
1						1						3		1	1						2	9
1						1		1			1										2	10
2						5		1			1				2						9	11
4						4	1		3	1		3			4						13	12
1						1	1								1						3	13
												1	1								1	14
									1			1	1		2						4	15
																		1				16
						1															3	17
																					1	18
												1	2	1								19
																					2	20

(10) 狭野弟上娘子															歌人名						
15-3771					15-3770					15-3769					15-3768					歌番号	
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句	卷
																				1	1
		1								1					4	1				2	2
															2	3				3	3
							2			1					7	4			3	4	4
		1									1				1	2		2	1	5	5
															2					6	6
										1					5					7	7
															1				2	8	8
		1													4	1				9	9
		1			1										4				5	10	10
1					1										9			1	1	11	11
			1		2					1					8			1	3	12	12
	1	1			2										10	2				13	13
																				14	14
	1		1		1										8	4			1	1	15
		1													2				2	16	16
							1								5	1		1		17	17
															2					18	18
							1								2	1				19	19
				1						2					3	3				20	20

(10) 狭野弟上娘子															歌人名						
15-3777					15-3774					15-3773					15-3772					歌番号	
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句	卷
									3											1	1
1					1				1	1										2	2
3									2							1				3	3
4			1		1				13	1										4	4
2	1								1	1										5	5
									4											6	6
									3					2					1	7	7
									5	1	1								2	8	8
1	1							1	1	3										9	9
	1								10							1				10	10
					1	1		1	13											11	11
			2					1	9	3		1								12	12
2	1		3						4										1	13	13
									2	1										14	14
4								1	1	1	1									15	15
									2											16	16
1	3	1							9											17	17
									2											18	18
									7	1										19	19
3								1	5											20	20

(10) 狭野弟上娘子					歌人名
15-3778					歌番号
五	四	三	二	初	句/卷
			1	1	1
		2		4	2
				5	3
2			1	4	4
				2	5
				1	6
			1	2	7
				1	8
1				2	9
			2	2	10
2			2	9	11
4			1	13	12
1			2	3	13
				1	14
2				4	15
					16
				3	17
		1		1	18
		1			19
				2	20